

きべりはむし

第17巻 第2号

目 次

尼崎西南部の昆虫（その1）	新家	勝	27
宝塚大橋の照明燈で採集した蛾（統報その9）	新家	勝	31
宝塚大橋の甲虫（その4）	新家	勝	36
宝塚のカミキリ2種	新家	勝	39
アカクビホシカムシ兵庫県南部の記録	沢田	和宏	39
ミツオホシハナノミ笠形山で採集	森田	真澄	40
兵庫県産のクビボソトビハムシ	高橋	寿郎	41
兵庫県における数種タマゾウムシの産地	高橋	寿郎	43
アラメホソツツタマムシ龍野市で採集	高橋	寿郎	46
シロスツタコゾウムシ神戸市内で採集	高橋	寿郎	47
アオドウガネ前脛節の畸形	高橋	寿郎	48
			49
県関係文献紹介			51
学会誌・同好会誌・連絡誌			51
会員異動			52
交換誌			

兵庫県昆虫同好会

1989年11月

尼崎西南部の昆虫（その1）

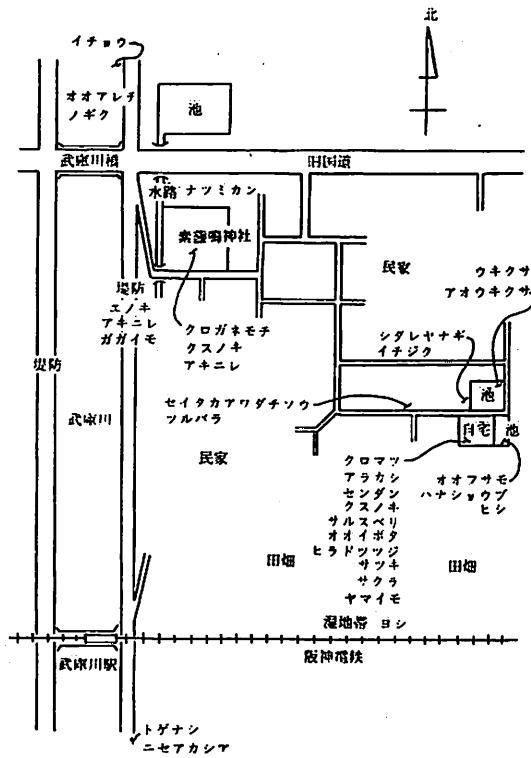
新 家 勝

I はじめに

約40年も前のデータであるが、昔の県下の昆虫相の一端を示す記録になると思うので、報告させていただきます。

筆者は1939年～1950年（昭和14年～25年）の間、現在の尼崎市大庄西町1丁目に住み、小中学生の頃の楽しみとして、付近の昆虫を採集し、約500種の標本を保有していた。その後の保管不良による破損や虫食い、水害、封入標本化の失敗のため多くの標本を失い、172種を保有するのみとなっているが、これら残存標本、ノートにある記録などを元に当時いた虫たちを紹介する。

1939年当時、武庫郡大庄村西であったこの地は、第二次大戦中の市町村合併により尼崎市西になり、近年の町名変更に伴い現在の町名になっている。筆者が住んでいたのは旧国道と阪神電鉄との間で、旧村落を中心に立て込んだ町家の外れ、田畑と接する新興地であった。初夏、サクラやシダレヤナギの枝を揺ると、ドウガネ、サクラ、ヒメサクラ、ヒメ、ハンノヒメ、コフキ、オオコフキなどのコガネムシが、地面一面に降ってきた、スイカの皮を捨てると、シロテンハナムグリでまっくらになった。どの池や田にも必ずギンヤンマがいた。秋、民家の垣根沿いに栽植されていたセイタカアワダチソウには、ハナアブ、オオハナアブ、シマハナアブなどのほか、アカ、ヒメ、キなどのタテハや時にはヒョウモン類も訪れ。「宮さん」さ呼ばれる素蓋鳴神社は魅力ある昆虫の住家でタマムシ、ゴマダラチョウ、シンジュサンなどがいたものである。改修工事が完成して立派に構築された武庫川堤防は、地元の人たちから「山」と呼ばれ、日当りのよい斜面の草地にはキアゲハが舞い、裾を流れる水路にはハグロトンボが多産した。この水路は、旧国道の北側にある池から湧出する武庫川の伏流水を導くもので、オニヤンマがときどき訪れた。住宅近くの池には、ヒシ、ウキクサ、アオウキクサ、外来品のオオフサモが生え、既にウシガエルやライギョが繁殖していた。池には新興住宅の下水が流れ込んでおり、やがて汚染のため魚たちが浮き上る池になって行った。筆者の家は二つの池に面しており、庭にはクロマツ、アラカシ、クスノキ、サルスベリ、オオイボタ、サツキ、ヒラドツツジ、サクラ、センダンなどの木々とハナショウブが栽植されていたので、いながらにして昆虫採集ができた。図にはこの地域の概略など採集と観察の背景を示している。



II Hemiptera 半翅目

1 Pentatomidae カメムシ科

(1) *Eucorysases grandis* Thunberg オオキンカメムシ

1944. 9. 13

1頭を一度採集したのみ。本種がよく発生するといわれるアブラギリを、この地域で見たことはなく、近くの武庫川にはヤブツバキの自生もなかったもので、他所からたまたま飛来したものであろう。ホソヘリ、オオクモヘリなどがいた記憶はある。ヒメジュウジナガカメについては第10巻第1号のとおり。

2 Belostomatidae タガメ科

(1) *Lethocerus deyrollei* Vuillefroy タガメ

1946. 5. 10

現在、各地で絶滅を心配されているが、当時は平地の池や田に普通にいた。

(2) *Ranatra chinensis* Mayer ミズカマキリ

1946. 5. 19

タイコウチ、コオイムシも多くいた。ヒシの葉やウキクサ、アオウキクサが、べこべこ上下しているところには、必ずコオイムシがいた。

3 Cicadidae セミ科

(1) *Cryptotympana japonensis* Kato クマゼミ

1947. 8. 16 1♂

1947. 8. 20 1♂

(2) *Graptopsaltria nigrofuscata* Motschulsky アブラゼミ

1947. 8. 9 1♂

(3) *Platypleura kaempferi* Fabricius ニイニイゼミ

1942. 6. 29 1♀

1943. 7. 11 1♂

(4) *Meimuna opalifera* Walker ツクツクホウシ

1946. 9. 5 1♂

1946. 9. 5 1♀

III Diptera 双翔目

双翔目は結構多く産したが、子供には今一つ魅力に欠けていたため、多少なりとも特色の感じられるものしか採集していなかった。そのうえ、保管不良のため失ったものが多く、僅か10種類の標本しか残っていない。

1. Bibionidae ケバエ科

(1) *Bibio tenebrosus* Coquillett ハグロケバエ

1947. 5. 2 1♂、1♀

例年5月初旬頃、庭のクロマツの梢付近を群飛し、時々、地上におりて来た。

(2) *Bibio rufiventris* Duda メスアケバエ

1947. 5. 2 1♀

2. Stratiomyidae ミズアブ科

(1) *Eulalia garatas* Walker コガタノミズアブ

1946. 6. 30

多産したミズアブに比べて、はるかに少なかった。これらが水田やその周囲の草むらにいたのに対し、ルリミズアブは植込みの葉上に普通に見られた。コウカアブは民家の便所やごみ捨場などに多産し、「便所蜂」と呼んで嫌われていた。

(2) *Microchrysa flaviventris* Wiedmann ハラキンミズアブ

1947. 6. 6

3. Tabanidae アブ科

(1) *Chrysops japonicus* Wiedemann クロメクラアブ

1946. 4. 21

4月の中頃から5月の始め、屋外で遊んでいると突然、首筋を刺された。牛馬が飼われていたため、ウシアブや小型で灰褐色のものも普通にいたが、こちらは羽音をたてて近づくので刺されることはなかった。

4. Bombyliidae ツリアブ科

(1) *Hyperalonia tantalus* Fabricius クロバネツリアブ

1946. 7. 19

(2) *Hyperalonia similis* Coquillett マエグロツリアブ

1950. 7. 25

(3) *Anthrax aygulus* Fabricius コウヤツリアブ

1946. 7. 26

5. Asilidae ムシヒキアブ科

(1) *Leptogaster trimucronotata* Hermann アメイロムシヒキ

1947. 8. 19 2 EA

背の低い植木の陰や緑の下近くなどを時々飛んでいた。この科では、シオヤアブは多く、アオメアブも普通にいた。

6. Dolichopodidae アシナガバエ科

(1) *Dolichopus nitidus* Fallén アシナガキンバエ

1946.7.5、1946.7.6

7. Syrphidae ハナアブ科

ハナアブ、オオハナアブ、アシフトハナアブ、シマハナアブなどが多産し、オオイボタやセイタカアワダチソウの花によく集った。10月中旬頃、シロスジベッコウハナアブが時々セイタカアワダチソウの花を訪れ、澄みきった秋空に浮かんでいた。

宝塚大橋の照明燈で採集した蛾（続報その9）

新 家 勝

1978年に始めた宝塚大橋での蛾の採集については逐次11回にわたって報告させていただいたが、10年を過ぎたので目撃例や付近での観察結果を参考にまとめてみたい。

薄暮の点燈時から宵の内の滅燈時までの間、宝塚大橋の照明燈には、いろいろな昆虫、殊に多くの蛾が飛来する。そして、路上や欄干上に着地するもの、植込みの中に姿を隠すもの、川床へ落下するもの、照明燈の周りを旋回したり、次々と照明燈を巡ったりした後、飛び去るものなど様々である。しかし、21時の滅燈に伴い、それまでそこここにいたものが急に少なくなる。多分、他の明かりを求めて飛び去るのに違いない。こうして明るくなった翌朝、蛾の姿はほとんど見られない。

ところで、ここに飛来する蛾を多い少ないから大別すると、(1)よく見られるもの、(2)見られなくなったもの、(3)見られるようになったもの、(4)散発的に見られるもの、(5)一度又は一時的に見られたものになる。一方、発生状況から大別すると、(a)定常的に、かなり多数発生している、(b)定常的又は継続的に一時的発生していたものが発生しなくなった、(c)発生するようになった、(d)散発的又は少しずつ発生している、(e)遠方で発生したものが、たまたま飛来した、そして、一部のものが一時的に発生したといったことが推定できる。こうした多い少ないの各状態と各発生状況は、ずれや複合があるとしても大体において対応しているのではないかと思う。採集漏れや観察の目こぼしは多く、発生状況を調べたわけではないので、どの種がどの状態に該当するかといったことを明らかにすることはできないが、傾向としては当然とも違わずではないだろうか。

それでは、ここに集まる蛾は、どこから来るのだろうか。周囲環境について多少触れてみたい。この辺りを地理的環境から見ると、六甲山系の東端と長尾山系とが武庫川を挟んで対峙した位置にある。植物相からみると、これらの山地は、大体貧相なアカマツ林でコナラが多いが、長尾山系の山裾にはアベマキやアラカシの古木が密生するところが多く、ところによってはかなり広がりを見せている。六甲山系ではヤシブシ類が多く、ウラジログシの群生するところもあるが、カシ類の古木はあまり見られない。しかながら、いずれにもいろいろな植物があり、多くの昆虫を発生させているものと思われる。橋付近の河川敷内には、アキニレやヤナギ類の小木はあるが、木らしい木はなく、ヨシ、ススキ、ヨモギ、セイタカアワダチソウなどが少し生えている。付近の民家や宝塚ファミリーランドには、クロマツ、クスノキ、センダン、アラカシなどが多い。橋上の植込みにはサザンカ、シャリンバイ、コクチナシ、ボックスウッド（洋種ツゲ）が栽植されている。

こうした環境のもとに多くの蛾が発生しているのだが、平地での観察場所としている安倉北4丁目、美座2丁目、光明町のいずれか又はいずれもで普通に見られるものは、宝塚大橋でも普通に見られる。また、山地での燈火採集で見られるものも結構多く見られる。これらのことから、付近の平地のものはもちろん、見通し位置にある六甲山系や長尾山系の眼下に宝塚大橋があり、なるほどと思わせる。

(1) コウモリガ科

キマダラコウモリガ1頭を一度採集したのみ。

(2) ボクトウガ科

ゴマフボクトウガ1頭一度採集したのみ。

(3) ハマキガ科

マツアトハマキ、チャハマキ、リンゴキマダラハマキ各1頭を一度採集したのみであるが、チャハマキは平地に普通。

(4) ミノガ科

オオミノガは、毎年多数見られるが、チャミノガとクロツヤミノガは各1頭を一度採集したのみ。

(5) マダラガ科

ウスバツバメ1頭を一度採集したのみ。9月末から10月の初め、市街地で昼間よく飛んでいるが、昼飛性であるため電燈にはほとんどやって来ない。

(6) イラガ科

イラガ、ヒメクロイラガ、テングイラガ、ヒロヘリアオイラガは、それぞれ二三度、採集又は目撃しているが、クロシタアオイラガ、アオイラガは、各1頭を一度採集したのみ。ヒメクロイラガ、アオイラガ、ヒロヘリアオイラガは、平地に普通。

(7) メイガ科

最も多いのは、大きく、よく目立つツゲノメイガあり、平地にも普通である。ここでは植込みのボックスウッドで発生するようであり、付近でも同様だと思ふ。次にマエアカスカシノメイガ、マメノメイガが多く、これらも平地に普通である。また、シロオビノメイガ、モモノメイガ、モンキクロノメイガ、ナカムラサキフトメイガが普通に見られる。著名なニカメイガ、スジツガ、ミツテンノメイガ、大きく一際きれいなオオキノメイガ、キバラノメイガ、クロモンソフトメイガ、アカシマメイガ、ツマグロシマメイガ、カパイロトガリノメイガ、ハチノスツツリガ、ウスアカマダラシマメイガなどが散発的に見られる。これらのうち、ミッテンノメイガ、シロオビノメイガ、モモノメイガ、マメノメイガ、モンキクロノメイガ、カパイロトガリノメイガは平地でも見られる。

(8) カギバ科

ウコンカギバ、アカウラカギバ、スカシカギバの3種のみ。ウコンカギバは見られなくなり、他

の2種は各1頭採集したのみ。

(9) トガリバ科

アヤトガリバは最近、見られるようになった。ホソトガリバ、ホソボソトガリバは散発的に見られる。ムラサキトガリバは1頭を一度採集したのみ。

(10) シャクガ科

最も多いのはナカウスエダシャクで、5月から11月まで、矮小型や、黒化型もよく混じり、平地にも普通である。マエキオエダシャクは多く、エグリツマエダシャク、ウスキツバメエダシャクは普通に見られる。ウスミドリナミシャク、フトジマナミシャク、ユウマダラエダシャク、ヨモギエダシャク、ヒロバウスアオエダシャクは、ここでは余り見られないが、平地に普通であり、ユウマダラエダシャクはマサキやマユミで多発する。ヒロバウスアオエダシャクは最近よく見られるようになった。オオシロアヤシャク、コシロオビアオシャク、クロスジオオシロヒメシャク、キエダシャクなどきれいなもの、キオビゴマダラエダシャク、オオゴマダラエダシャクなど大型のものは一度採集したのみ。チャノウンモンエダシャクは、当初普通だったが、最近は見られない。

(11) カレハガ科

マツカレハは普通。ホシカレハは散発的に見られるが、カレハガ、オビカレハ、ツガカレハは見られなくなった。

(12) テンサンガ科

シンジュサンは平地で普通に発生しており、散発的に見られる。ヤママユ、クスサン、ウスタビガは見られなくなってしまった。殊にウスタビガは1978年のみ見られた。オオミズアオ、オナガミズアオは宝松圏辺りの山地でよく見られるもので、ここでも散発的に見られる。

(13) スズメガ科

セスジスズメ・コスズメは多く、エビガラスズメ、シモフリスズメは普通であり、いずれも平地に普通である。クロスズメ、ホソバスズメ、ブドウスズメ、ベニスズメは散発的に見られる。メンガタスズメは採集、目撃各1例ずつがある。サザナミスズメは見られなくなってしまった。モモスズメ、ウンモンズズメは意外に少ない。日中活動するホシホウジャク、クロホウジャクは一度採集したのみだが、ホシホウジャクは平地に多く、クロホウジャクは武庫川周辺では見たことがない。

(14) シャチホコガ科

ナカグロモクメは多い。ムクツマキシヤチホコ、オオトビモンシャチホコ、セグロシャチホコは当初、普通だったのに見られなくなったが、オオトビモンシャチホコ、セグロシャチホコは平地でよく見られる。モンクロシャチホコは余り見られないが、平地には普通である。ギンモンズズメモドキ、ヒメシャチホコ、オオモクメシャチホコ、ホソバシャチホコ、スズキシヤチホコ、クワゴモ

ドキシヤチホコ、ツマアカシヤチホコは各1頭を一度採集したのみ。ギンモンズズメドキは北部山地の夜間採集で取れるそうである。

05 ドクガ科

ブチヒゲヤナギドクガは多く、マイマイガ、チャドクガが普通に見られる。チャドクガは植え込みのサザンカで発生することがある。6月初旬のキアシドクガの群飛は、見られなくなってしまった。よく似たエルモンドクガは1頭を一度採集したのみ。カシワマイマイは散発的に見られるが、ウチジロマイマイは見られなくなった。1頭を一度採集したのみのナチキシドクガ、マガリキドクガは偶産ではないかと思われる。

06 ヒトリガ科

コケガ亜科のうち、ヨツボシホソバは多く、マエキクロホソバ、クビワウスグロホソバは散発的に見られたが、漸次見られなくなっている。ゴマフオオホソバ、キベリネズミホソバ、ムジホソバ、アカスジシロコケガは1頭を一度採集したのみで平地では見られない。ヒトリガ亜科では、カクモンヒトリが多かったが、少なくなって来た。セスジヒトリ、オビヒトリ、キバラゴマダラヒトリは普通に見られ、シロヒトリ、アメリカシロヒトリは散発的に見られる。セスジヒトリ、アメリカシロヒトリ、カクモンヒトリは平地でも時々、見られる。アカヒトリ、クワゴマダラヒトリは見られなくなった。サラサヒトリは1頭を一度採集したのみであるが、平地での採集例がある。

07 ヤガ科

キバラケンモンは多く、リンゴケンモン、ナシケンモンは普通、オオケンモン、サクラケンモンは散発的に見られる。クロクモヤガ、オオバコヤガは多く、カバスジャガ、コウスチャヤガ、アカフヤガ、ウスイロアカフヤガ、シロモンヤガは普通に見られる。クロクモヤガは平地でも普通に見られる。ニセタマナヤガは増加が見られない。タバコガ、オオタバコガ、ツメクサガは各1頭を一度採集したのみ。ヨトウガ、アワヨトウ、クサシロキヨトウは多く、シロシタヨトウは普通、クロシタキヨトウ、アトジロキヨトウは散発的に見られ、ヨトウガは平地でも普通に見られる。シロスジアオヨトウ、ハスモンヨトウ、シロテンウスグロヨトウは多く、シマカラスヨトウ、ノコメセダカヨトウ、シマキリガ、チャオビヨトウ、ムラサキツマキリヨトウは普通に見られる。これらのうち、シロスジアオヨトウ、シロテンウスグロヨトウは平地でよく見られる。フサヤガは多く、キノカワガ、アカスジアオリンガは普通、ヤマトホソヤガは少ないながらも散発的に見られる。キンモンシロウワバ、エゾギクキンウワバ、ウリキンウワバは普通、キクキンウワバは散発的に見られる。ホソオビアシプトクチバ、アカエグリバは普通、オスグロトモエ、ウスズマクチバは散発的に見られるが、キシタバ、ムクゲコノハ、アケビコノハなどは各1頭を一度採集したのみである。ソトウスグロアツバ、オオアカマエアツバは普通である。ヤガ科中、ホソバミドリヨトウ、ヨシヨトウ、

オウトウウスグロクチバは偶産ではないかと思う。未同定であったものの一つが、ウスクロモクメヨトウ (1982.6.1 武庫川) であることがわかった。

これまでの報告は、主として初回採集の記録だけであり、多い少ない、動静などにあまり触れていなかった。ところが、こうしたことを全種について書くと膨大になるので、かいつまんで報告した。殊にメイガ科、ジャクガ科、ヤガ科など多種類のものは主なものだけに触れた。10年間に採集した種類数は18科 332種であり、科別に示すと次の通りである。

コウモリガ科	1種	メイガ科	43種	スズメガ科	16種
ボクトウガ科	1種	カギバ科	3種	シャチホコガ科	12種
ハマキガ科	3種	トガリバ科	4種	ドクガ科	13種
ミノガ科	3種	ジャクガ科	51種	ヒトリガ科	20種
マダラガ科	1種	カレハガ科	5種	ヤガ科	143種
イラガ科	6種	テンサンガ科	6種	トラガ科	1種

なお、現在も採集を続けており、1988年にも11種を新たに採集した。採集品は、まだまだ増えるので、追って報告させていただく。最後になりましたが、寄稿をお奨めいただきました高橋寿郎氏、同定に際してご指導いただきました東正雄先生、木下総一郎先生に改めて厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- 講談社 日本産蛾類大図鑑 I、II
- 北隆館 原色昆虫大図鑑 I
- 保育社 原色蛾類図鑑 上、下
- 宝塚市 宝塚市史 第七巻
- 神戸新聞出版センター 六甲の自然

宝塚大橋の甲虫（その4）

新 家 勝

今回は、カミキリモドキ科からゾウムシ科までについて報告する。

19. Oedemeridae カミキリモドキ科

- (1) *Xanthocroa waterhousei* Harold アオカミキリモドキ

V. 20. 1983 武庫川町

VI. 18. 1984 南口2丁目

- (2) *Xanthocroa luteipennis* Marseul キバネカミキリモドキ

VI. 13. 1987 武庫川町

20. Meloidae ツチハンミョウ科

- (1) *Zonitis japonica* Pic キイロゲンセイ

第14巻第1号で紹介した通り。その後、VII. 9. 1986及びVII. 10. 1987にも飛来した。

21. Cerambycidae カミキリムシ科

- (1) *Megopis sinica* White ウ斯巴カミキリ

VIII. 7. 1987 南口2丁目

- (2) *Prionus insularis* Motschlsky ノコギリカミキリ

VI. 25. 1985 南口2丁目

- (3) *Spondylis buprestoides* Linne クロカミキリ

VIII. 4. 1983 武庫川町

- (4) *Arhopalus rusticus* Linné サビカミキリ

VI. 21. 1979 南口2丁目

前種同様、非常に多い。

- (5) *Pseudaolesthes chrysothrix* Bates キマダラカミキリ

第11巻第1号で紹介した通り。その後、一度も見えていない。

- (6) *Mallambryx raddei* Blessig ミヤマカミキリ

VI. 6. 1979 南口2丁目

- (7) *Cryptoclytus caproides* Bates キスジトラカミキリ

VI. 3. 1979 南口2丁目

- (8) *Purpuricenus temminckii* Guérin-Meneville ベニカミキリ
 V. 23. 1979 南口2丁目
- (9) *Psacotha hilaris* Pascoe キボシカミキリ
 VII. 14. 1984 武庫川町
- (10) *Anoplophora malaciaca* Thomson ゴマダラカミキリ
 VII. 13. 1983 南口2丁目
- (11) *Batocera lineolata* Chevrolat シロスジカミキリ
 VI. 19. 1981 南口2丁目
- (12) *Mesosa hirsuta* Bates カタジロゴマフカミキリ
 VIII. 8. 1986 南口2丁目
- (13) *Niphona furcata* Bates ハイロヤハズカミキリ
 IV. 27. 1983 南口2丁目
- (14) *Pterolophia caudata* Bates トガリシロオビサビカミキリ
 VI. 25. 1984 南口2丁目
- (15) *Pterolophia annulate* Chevrolat ワモンサビカミキリ
 X. 19. 1978 南口2丁目

4月下旬から5月中旬にかけて、よく飛来するが、10月中旬にもよく見られる。

22. *Chrysomllidae* ハムシ科

- (1) *Pyrrhalta tibialis* Baly エノキハムシ
 VI. 30. 1981 武庫川町
 VI. 11. 1985, VI. 25. 1987 南口2丁目

23. *Anthribidae* ヒゲナガゾウムシ科

- (1) *Tropideres flabellicornis* Sharp シリジロヒゲナガゾウムシ
 V. 21. 1979 武庫川町

24. *Curculionidae* ゾウムシ科

- (1) *Listroderes obliquus* Klug ヤサイゾウムシ
 X. 9. 1983 南口2丁目
- (2) *Hylobius abietis* Linné マツアナアキゾウムシ
 V. 30. 1983 武庫川町
- (3) *Hylobius elongatus* Roelofs ホソアナアキゾウムシ
 V. 10. 1979 南口2丁目

(4) *Ectatorrhinus adamsi* Pascoe マダラアシゾウムシ

VIII. 10. 1979 武庫川町

(5) *Hyposipalus gigas* Fabricious オオゾウムシ

VI. 11. 1981 武庫川町

III まとめ

1978年から10年間、宝塚大橋の照明燈での蛾の採集の傍ら採集した甲虫のうち、最高の珍種はミヤコアラハダチャイロコメツキである。誤同定のまま埋もれてしまうところを、岸井先生に同定していただき、陽の目を見ることができた。その外には、これ程のものは見当たらないが、既に本誌で紹介したセマダラナガシクイやキイロゲンセイ、それにアラメヒゲプトゴミムシダマシなどが普通種ではなさそうである。ここで採集した甲虫は、109種で、採集漏れもあることだから、実際はもっと多くの甲虫が飛来する筈である。現に、この付近の河原にと言われていながら、まだ採集していないものとして、オオサカアオゴミムシやダイミョウゴミムシがある。ここで採集をして大変痛ましいのは、路面に降りた昆虫が次々と通行人に踏みつぶされていくことである。たとえドウガネブイブイであっても拾って植込みの中へほうり込んでやりながら、今後ともここでの採集を続けたい。

最後になりましたが、コメツキ類を同定していただきました岸井先生、大阪市立博物館主催の昆虫同定会で各種の甲虫を同定していただきました諸先生方、ハラゲピロウドコガネについて色々ご教示いただきました高橋寿郎氏に厚くお礼申し上げます。

IV 参考文献

北隆館 原色昆虫大図鑑 II

LAMELLICORNIA 研究会 SAIKAKU 第4号

仲田元亮 能勢の昆虫

宝塚のカミキリ 2 種

新 家 勝

筆者は宝塚市内で50種ばかりのカミキリムシを採集しているが、市内であまり見かけない2種について報告させていただく。

1. *Ceredium sinicum* White テツイロヒメカミキリ

1984. 6. 30 宝塚市安倉北4丁目 安倉上池 1♀

天王寺川からの取水路で溜まり水にはまり、もがいていたもの。

大阪府下箕面方面での記録はかなりあるそうだが、県下での記録はどうもないようである。

2. *Rhaphuma quinquefasciata* Castelnau et Gory ヨツスジトラカミキリ

1988. 7. 28 宝塚市安倉北4丁目 安倉上池

キクイモの葉上にいたもの

淡路島、川西市、伊丹市、神戸市烏原水源池など県下での記録は多いが、市内での記録はまだないようである。

なお、テツイロヒメカミキリを同定していただいた東 正雄先生と近郊での記録についてご教示いただくとともに、本誌への報告をお奨めいただいた高橋寿郎、小田中 健の両氏に厚くお礼申し上げます。

アカクビホシカムシ兵庫県南部の記録

沢 田 和 宏

兵庫県のカッコウムシ類については高橋寿郎氏が「IRATSUME No. 6」(1982)に16種をまとめておられる。

そのうちアカクビホシカムシ *Necrobia ruficollis* FABRICIUS の記録は、兵庫県中部の氷上郡(1958)、ならびに北部の出石郡但東町(1963)の文献記録 2 例だけが報告され採集例は少ないようである。

筆者は本種を次の通り、兵庫県南部の神戸市および三木市で採集しているので分布資料として追加しておきたい。

2 exs., 神戸市長田区大日丘、24. IX. 1986; 2 exs., 三木市下石野、27. IX. 1986

2例共、養鶏場の鶏糞を調べている時に得られたもので、採集頭数は上記の通りであるが両地共多数の個体が見られた。

ミ ツ オ ホ シ ハ ナ ノ ミ 笠 形 山 で 採 集

森 田 真 澄

1987年7月7日、笠形山西麓（神崎町側）でミツオホシハナノミ *Hoshihananomia mitsuoi* NAKANE et NOMURA を1頭採集したので報告する。

ヤマザクラの枯木に数頭、動作敏捷に這い回っていたものの1頭である。1989年6月18日再度、同一枯木に数頭を目撃した。

なお、同一地点で下記の甲虫を採集しているので、参考までに報告する。

スギカミキリ *Semanotus japonicus* (LACORDAIRE) 1 ex., 15-V-1989

タカサゴシロカミキリ *Olenecamptus fomaosanus* PIC 1 ex., 10-VIII-1987

ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* SAUNDERS 2 ex., 15-VI-1988

ワモンナガハムシ *Zeugophora annulata* (BALY) 1 ex., 2-V-1989 採集地点付近に食草のニシキギを見ている。

クロカナブン *Rhomborrhina polita* WATERHOUSE 1 ex., 8-VIII-1988, 1 ex., 11-VIII-1988. コナラの樹液を吸っていた。

兵庫県産のクビボソトビハムシ

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 2 9)

高 橋 寿 郎

1935年中條道夫博士は当時の日本産クビボソトビハムシ属 (*Liprus*) の分類学的論文を台湾産1新種をふくみ5種について発表になられた (*Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa*, Vol. 25, No146, p. 395-398)。その時点での日本産は4種と云うことになっている。それ以後暫くの間このクビボソトビハムシ属についての研究は出ていないようである。1959年大野正男教授は“日本産 *Liprus* 属について”なる論文を発表になり (*日本生物地理学会々報* Vol. 21, No4, pp.33-44, pl. 1) 日本産クビボソトビハムシ属4種3新亜種に就いて詳しく解説をされた。翌1960年には中條道夫・木元新作両博士は *Liprus hirtus* Baly をタイプとして新属 *Pseudoliprus* を設立された (*Niponius*, Vol. 1, Part. 4, p. 9)。その時には *Liprus nigritus* と *suturalis* は *L. hirtus* のシノニムと考えられるむね処理されている。しかしながら現在では日本産 *Pseudoliprus* は4種と云うことになっている (木元新作, 原色日本甲虫図鑑, IV, pl. 42, p.215, 1984., 昆虫と自然, Vol. 23, No3, p.41, 1988)。

兵庫県からは従来からクビボソトビハムシ *Pseudoliprus hirtus* とクロクビボソトビハムシ subsp. *flaviceps* の1種1亜種が記録されていただけであるが、筆者の貧弱な標本を調べて見た所3種1亜種を産するよう思うのでそれ等を此処に記録しておきたい。

Pseudoliprus nigritus (Jacoby)

アラメクビボソトビハムシ

本種は M. Jacoby により Oyama (相模大山) を原産地として記載された種 (1885) であるが、その後あまり記録の知られていない種である。と云うのは *P. hirtus* のシノニムと考えられていたことがあるからと考えられる。木元博士の検索表によると後肢腿節が黒色。前胸背板は明瞭なさめ肌状印刻され強い点刻を密に装い、点刻の直径はその間室より幅広いという特徴で *P. hirtus* と区別出来るとなっている (1988)。同博士の原色図説もあるがこの種の方が *P. hirtus* より大きいように思われる。県下での記録は全くなかったが神戸市内で採集したものがこの種に該当すると考えられる。食草はヤマブドウ、ツタと知られている。

産地：神戸市六甲山 (2exs., 28-V-1987), 伊川谷町前開 (lex., 7-VI-1988)。

Pseudoliprus hirtus (Baly)

クビボソトビハムシ

Lewis の採集した長崎産の標本に基づいて古く1874年 Baly により記載された種である。

従来この属のものは総てこの種に取扱われていた時期があった様で、県下での記録もこの種の記録はやや古くからある。どちらかと云えば大野正男教授が記載された亜種の方が多くいる様に思われる。

食草はツタ、ノブドウ、ヤマブドウ、サンカクズルなどが知られている。

産地：氷上郡柏原 [山本, 1953, 1958]、相生市三湊山 [大野, 1967]。宍粟郡音水 (2exs., 11-1972, 7exs., 25-VI-1972, lex., 3-VI-1973)。養父郡水の山 (1♀, 24-VII-1955, 1♀, 25-VII-1955, 2♂, 1♀, 27-VII-1957)。美方郡扇の山 [辻, 岸田, 1972]、浜坂町城山 [磯野, 1985]。

subsp. *flaviceps* (Ohno)

クロクビボソトビハムシ

産地：三原郡成相峠 [大野, 1969]。洲本市先山 [大野, 1969]。神戸市丹生山 (lex., 5-V-1956), 金剛童子山 (lex., 24-VI-1956)。多可郡烏羽 (lex., 5-VII-1975)。宍粟郡音水 (lex., 25-VI-1972, 2exs., 15-VII-1973)。

Pseudoliprus suturalis (Jacoby)

セスジクビボソトビハムシ

小楯板に全く剛毛を欠く。一般に褐色、暗褐色。上翅会合部は黒色、時に体背面は全体黒色。色彩と3種の中では一番小さい。

本種は M. Jacoby (1885) により Lewis が Fukushima (木曾福島) で得た1頭の♂標本により記載されたもので、その後の記録がほとんど知られていない種である。

県下からも今迄全く記録のなかった種である。あまり県の南側並びに平地にいないようである。食草はヤマブドウと言われている。

産地：朝来郡生野菖蒲沢 (1♂, 8-VII-1956)。宍粟郡音水 (lex., 11-VI-1972, lex., 25-VI-1972)。養父郡水の山 (lex., 25-VII-1955)。

(MAY. 1989)

兵庫県における数種タマゾウムシの産地

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 3 0)

高 橋 寿 郎

日本におけるタマゾウムシ亜科 (Subfamily Cioninae) のものは種数が割と少ない。1930年河野広道博士は2新種をふくむ1属6種の当時の日本産タマゾウムシの検索表を示された。1959年には森本桂博士が日本産タマゾウムシ亜科4属9種を目録にされたが1984年に発表された目録では4属7種となっている (この目録の内1種には疑問符がつけられていてこの種に就いて森本博士の解説がある、1983. B記号がついているので、この4属7種で日本産の70-90%に当たることになる)。河野博士以後この亜科の追加種は1956年四国から Voss 博士により記載された種があるだけである (Voss 博士の論文では近似2種との検索表も示されている)。

まだ日本産タマゾウムシ亜科のものに就いては流動的なものがあるが、既知種は4属9種と考えられその種類も少ないグループのようである。

原色による図説は横山桐郎博士 (1931) 1種。中根猛彦博士、3属5種 (1963)。竹中英雄氏、3属4種 (1975)。森本桂博士、3属6種 (1984) がそれぞれある。また、生態に就いては井上元則博士 (1941, 1953)、大野正男教授 (1955)、中條道夫博士 (1958) の貴重な報文がある。割合と独特の形態をしており同定が難しいグループではない様に考える。

ところで、このグループの兵庫県産と云うものは現在の所3属8種が記録されている (内2種は種名が確定出来ていない)。結構県下に分布しているのであるが、夫々の記録と云うものが大変少ない。筆者も未採集の種もある。ここではその内5種について県下での産地を中心に若干紹介しておきたいと思う。

○ シロオビタマゾウムシ *Steronychidius galloisi* (Hustache)

兵庫県下では養父郡水の山の記録 [lex., 8-VII-1873, Ohkura leg. 畑中, 1977, 高橋, 1981] が知られているだけであったが、筆者は西宮市船坂 (六甲山北面山麓) で1頭採集した (lex., 5-VI-1987)。この種に就いては生態なども良くわかっていないようであり森本博士も少ないとされている (1984)。県下での産地が今一つよくわからない種である。爪は1本である。

○ ハイイロタマゾウムシ *Stereonychus japonicus* Hustache

本種は兵庫県下から従来産地が知られていなかったと思う。筆者は次の様に採集している。神戸市山の街 (lex., 29-V-1976)、伊川谷町前開 (8exs., 7-VI-1988)、相生市三邊山 (lex., 3-V-1974)、宍粟郡音水 (lex., 11-VI-1972)。森本博士も少ないと書いておられる (1984)。生態などはよくわかっていない種のようなのであるが神戸市の伊川谷ではウツギの花を網で掬うと割合入って来た。県下に広く分布しているのではないだろうか。この種も爪は1本である。

○ アカタマゾウムシ *Stereonychus thoracicus* Faust

よく知られたヤチダモの害虫である。従ってその生態もある程度知られている (井上, 1940, 1953)。どう云うわけか本種も県下での記録が全く見られていない。神戸市内鳥原池畔の道路横で割合と採集出来る。恐らく広く分布している種だと思うのだが記録の見られない種である。

産地：神戸市鳥原 (lex., 25-V-1975, lex., 29-V-1977, lex., 5-V-1982, 3exs., 19-V-1982, 4exs., 23-V-1982, 2exs., 24-V-1982, lex., 25-V-1982, lex., 29-V-1983, lex., 4-VI-1984, lex., 21-VI-1984)

○ クロタマゾウムシ *Cionus hilleri* Reitter

本種の幼虫はキリの葉に粘着して食害することで知られていて、キリノイボゾウムシとも云われている。こちらはキリの樹があれば採集はそれ程苦勞は無い様に思う。県下に広く分布している種のようなのである。本種の幼虫をツマジロカメムシ *Menida violacea* Motschulsky が刺し殺すと云う観察記録を大野正男氏がしておられる (Rostria, №16, p.65, 1967)。

産地：川西市横池 [仲田, 1978, 1982]。三木市口吉川 (6exs., 3-VII-1986)。小野市山田 (2exs., 7-VIII-1987)。加東郡社町三草 (2exs., 14-VII-1989)。龍野市神岡 (lex., 19-V-1988, 5exs., 21-VII-1988)。氷上郡 [山本, 1958]。養父郡氷の山 [畑中, 1977, 高橋, 1981]

○ クロオビシロタマゾウムシ *Cionus latefasciatus* Voss

本種は始めに記したごとく中條道夫博士が徳島県剣山で採集された4頭の標本に基いて Voss 博士が新種として記載されたものであり (1956)、その後再度同博士は採集に行かれ10個体ばかり見ら

れ、それがオオヒナノウスツボを食している状況も確認、その状況を詳しく説明しておられる(1958)。

最近の森本 桂博士の原色日本甲虫図鑑(Ⅳ)(pl. 57, f. 27, p.292, 1984)でも分布は四国と
なっている。しかしながら本種を本州新記録として辻 啓介氏が御自身氷の山で採集された1頭(11
-VI-1972)を記録しておられる(きべりはむし Vol. 1, №1/2, 1972)。

残念ながらその後の記録は現れないが、食草もわかっていることだし、是非再度調査をして見たい
ものだと考えている。

参考文献

(兵庫県関係のものは省く)

中條道夫、1958. クロオビシロタマゾウムシについて

新昆虫 11(1):24-25.

井上元則、1940. ヤチダモ造林地に発生する害虫と其予防法に就いて

北海道林業試験場時報第25号:1-2.

——、1953. 林業害虫防除論 中巻、p.144-146.

Kōno, H., 1930. Langrüssler aus dem Japanischen Reich.

Ins. Mats. 4(4):145-162.

森本 桂、1962. 日本産ゾウムシ科目録(Ⅰ)

九州大学農学部学芸雑誌16(2):183-217.

——、1983. 日本から記載又は記録されて、その後とれないゾウムシ類(2)

北九州の昆虫 30(3):197-200, pl. 15.

——、1984. List of the superfamily Curculionidea of Japan compiled by K. Morimoto

Nov. 15, 1984, p.1-21.

——、1984. 原色日本甲虫図鑑(Ⅳ). pl. 57, p.292.

中根猛彦、1963. 原色昆虫大図鑑(Ⅱ)(甲虫編)pl. 189, p.377.

大野正男、1955. マルモンカタゾウムシに関する知見

新昆虫 8(8):33-36.

竹中英雄、1975. 学研中高生図鑑. 昆虫Ⅱ甲虫. p.160, 171, 289, 394.

Voss, E., 1956. Über einige japanische Rüsselkafer (Col. Curc.)

Akitu 5(1):13-16.

横山桐郎、1931. 続. 日本の甲虫

Taf. 7, f. 13, p.55.

(AUG. 1989.)

アラメホソツツタママシ龍野市で採集

(兵庫県甲虫相資料・231)

高橋寿郎

アラメホソツツタママシ *Paracylindromorphus richteri* Théry は従来兵庫県下からの記録が無かったが1988年7月21日蜂谷幸雄氏は龍野市神岡町のススキから lex., 採集された(標本筆者保管)。県下初記録として報告しておく。標本を御恵与下さった蜂谷氏に厚く御礼申しあげる。

尚本種に極めて良く似たホソツツタママシ *Paracylindromorphus japonensis* (E. Saunders) の県下の記録も大変少ない。筆者は次の様に採集しているので記録しておく。こちらも全部ススキの葉上からの採集である。

神戸市押部谷町木見 (lex., 23-VI-1980) (きべりはむし Vol. 8, No2, 1980)、美濃郡吉川町 (lex., 27-VI-1985)。

(AUG. 1988)

シロスジタコゾウムシ神戸市内で採集

(兵庫県甲虫相資料・232)

高橋 寿郎

シロスジタコゾウムシ *Hypera adspersa* (Fabricius) はヨーロッパ産標本で Fabricius によって Curculio 属で記載された種である (Ent. Syst. 1(2) : 413, 1792)。日本からの記録は *Phytonomus adspersus* var. *japonicus* として Petri によって記録されている (Verh. Siebenb. Ver. Nat., 2, Sep.-Band. IV : 128, 1901)。

A. Hoffmann によるとヨーロッパ、シベリア、日本に産する種としている (Faune de France 59, Coleopt. Curculionidae pp. 580-581, 1954)。

森本 桂博士は *Hypera adspersa* として日本の北海道、本州に属する種として記録された (Sci. Bull. Fac. Agr. Kyushu Univ. 19(3)344, 1962)。さらに原色でも図説されている (原色日本甲虫図鑑 IV, pl. 55, f. 30, p. 282, 283, 1984)。

セリ、ハマボウフを食草とするようである。兵庫県下から従来記録がなかった種だと考えられるが、筆者は神戸市内で 2exs. 採集しているので記録しおきたい。野外で道端の草葉上にいるのを共に採集したのであるがはっきりした白い筋が印象的で割合大きく (体長 7mm よりやや大きい) 大変目につき易い。ただし個体数は多くないのかもしれない。産地。神戸市西区伊川谷前開 (lex., 21-VII-1988, lex., 28-IX-1988)。

(AUG. 1989)

アオドウガネ 前脛節の畸型

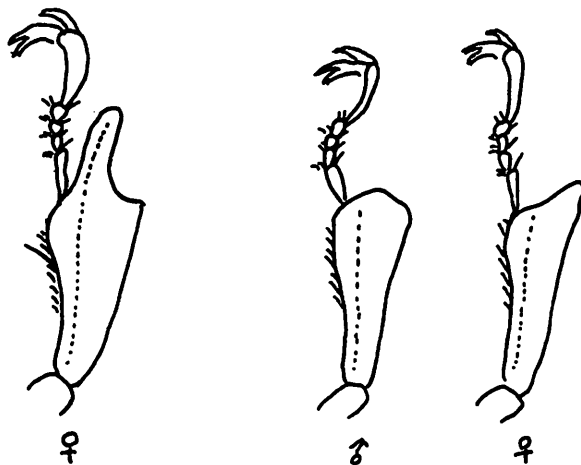
(兵庫県甲虫相資料・233)

高橋 寿郎

1989年7月に神戸市須磨区緑町地下鉄神戸総合運動公園駅の電燈に来ていたアオドウガネ *Anomala albopilosa* Hope を、山下剛史氏が採集されたものを蜂谷幸雄氏の手を経て御恵与頂いた。データは次のようである。1♀, 12-VII-1989. 2♂, 3♀, 16-VII-1989, 1♀, 1♂, 20-VII-1989.

初め頂いた時、アオドウガネにしてはやや小型で翅鞘の色が茶色味を帯び一寸と変わった印象を受けるものが数頭いた。余り気にもかけず暫くして整理して同じアオドウガネの所に入れようとしてその内の1♂1♀(20-VII-1989)の前脛節が変だと云うことに気がついた。所謂前脛節の外歯と云うものがこの2頭には全く無い(1頭は右前脛節はなくて左前脛節は通常の外歯がある)。採集者山下氏は蝶が好きで、甲虫の採集は単に無作為に目についたものを採集して下さる方である。それにしても頂いた3♂5♀の中に1♂1♀の畸型が出てくると云うのは大変高率である。筆者所有の各地産200頭近くのアオドウガネの中にはこんな畸型は見られなかった。

既に他に記録されているものかもしれないが多数の文献を調べる根気も今無い。貧弱な筆者の知識ではこの様な報告があったのを知らない。何はともあれ畸型であり特にどうと云うことではないが、採集されたものに比して2頭も出ていること、色彩も若干異なる様なもの気にかかる。最近県下の鳩とか猿の手、足の畸型の発生が多いとか、何か我々の知らない異常影響から出てくるのではないかと



正常なアオドウガネ
右前脛節

畸型
右前脛節

いらぬ考え方をしたりして此処にその状況を報告しておいたらとまとめて見た。図にかいた様な畸型で♂♀の判別は腹部を開いて交尾器を剔出した。♂交尾器の形状は他のアオドウガネと異なった所は見られない。♂の方は両前脛節とも外歯と云ったものが無いが、♀の方は左前脛節は通常の外歯をもっていて右だけが図の様になっているものである。この採集地点はいわゆる西神地域に至る途中で、このあたりから西は最近急速に開発がされている地域で自然を残そうと云った配慮もあったりするが、虫が住宅に多くやって来て困ると云った住民の苦情が殺到している地域で、無理な殺虫剤、除草剤あたりを散布している恐れは充分であり、不自然と云うか環境破壊はかなりのものであり、あるいは虫達にもその影響が現れて来るのではと勝手な穿索をして見たくなる次第である。

蛇足ではあるが戦前アオドウガネは神戸市内ではほとんど採集したことが無かったが、戦後特にここ10年位前からいやに多いなあと云う印象を受けるコガネムシである。

(SEP. 1989)

県関係文献紹介

- 三木市立三木中学校生物部採集報告書。 三木中学校生物部平成元年3月24日刊。35p。
主として甲虫類の三木市を中心にした記録である（一部赤西溪谷あたりの記録もふくまれている）。可成り珍しい種の記録もある。ただ全体を統一した出版物にして頂けたらと思われる。東川直樹氏の“美濃川に生息する蛭蝸目の調査”はワープロで打ってあり（他は手書き）、内容も立派なものであるばかりでなく仕上りも大変きれいだ。ただ全部にページは入れてほしい。今後継続しての出版を希望する。（本書は西田雅昭氏から御恵送頂いたものである）。
- 山口福男 ムシの世界（1-21）。 山陽ニュース № 456-475（1988-1989）
“山陽ニュース”1988年1月号より上記標題の下に毎号テーマを決めて連載されている（連載は継続中。21が1989年9月号）。例えば18は“ホテル”に就いてである。読物風にまとめられてどれも楽しく読める（山口福男氏からは1-12迄のコピーと15を御恵与頂いてこのシリーズを承知した。その後山陽電気鉄道 K. K. の方に依頼して毎号送って貰っている）。御恵与頂いた山口福男氏に厚く御礼申しあげる。
- 神戸市刊 新修 神戸市史 歴史編 I, 自然・孝古。A5判 770p。
神戸市制百周年記念事業として上記第1巻が1989年6月9日市販された（年間1-2巻ずつ刊

行、最終的に16巻になると)。この第1巻は自然と云うことで昆虫に関する記事がある。昆虫に就いては第2章神戸の生物とその生態の中で、第2節山地・丘陵の生物とその生態 2. 山地・丘陵の動物 p.56-63. 第6節、貴重な生物とその保護。3. 貴重な動物(昆虫類) p.144-145に解説がされており、p.5のカラー頁の所にキベリハムシ、ギフチョウ、ハッチョウトンボが出ている。昆虫の執筆は山口福男氏が主に担当されているように思われる。概略的な説明となっているがこの種の書としては止むを得ないと考える(一般書店で販売5,000円)。尚余談ではあるが同じく神戸市制百周年記念事業として“写真集神戸100年”が神戸市から出版されている(平成元年4月1日発行、定価3,800円)古い神戸の景色が写真で示されており、明治2年ごろの“生田の森”とか明治20年代後半の“諏訪山から市街地を望む”写真など G. LEWIS 採集時代が偲ばれて感無量である。同じく市民のグラフ“こうべ” No198, 199 (1989, 4, 5月)にも(新聞に見る神戸100年(上・下))が出ていて古い時代の神戸の様子がうかがえる。3月には後藤書店創業80周年記念出版として落合重信著 増訂 神戸の歴史。通史編が出版されている(382 p. 2,800円)。残念ながら性格上自然に関する記事はない。ただ“元禄兵庫津絵図”が原色で挿入されている。さらに7月には神戸市制100周年記念史“神戸”が各戸に配布された。

○ 緑蝶 第4・5号(1989年6月)

本誌は兵庫県産の蝶の記録も発表されているが、蝶愛好者の緑蝶会という同好会の会誌である。会員名簿を見ると大阪在住の方が大部分で(現在会員数23名)、事務局も大阪にある。大変立派なカラー表紙、カラー図版も入り写真も多く全文アート印刷で(38p.)、大変な印刷代がかかっているのではといらぬ心配が出る。どうも久方振りの出版のようで今後4年に1回発行を目標にしていると云うかなりマイペースの会誌のようである。但し例会は年10回程開催していると。

貴重なこの会誌を御恵与下さった蜂谷幸雄氏に厚く御礼申しあげる。

○ Nature Kids 04 (June 1989)

登日邦明氏が主宰される Nature Association の機関誌であり、一般向けの自然保護の啓蒙書であるのだが、「04」号の中には三田市に出来た青野ダム建設により“トンボの楽園”が消えたことが詳しく報導されている。

○ 北摂の蝶 大阪昆虫同好会創立20周年記念出版(1989年7月刊)

会誌「Crude」と同じ大きさであるが表も裏表紙もカラー、総100ページであるがカラープレートが4pl. ある。北摂の蝶のリストは最後にまとめてあり、本文は其中で注目種各論と云う形式になっており、記録、生息環境およびその変遷、今後の展望と課題等が各種に説明してある。写真とか文献も入ったりしている。その他に観察地案内として大阪府・兵庫県下12地点の解説もある。執筆者は16名となっており分担して執筆されている。同好会の出版としてはなかなかの大

作でただただ敬服するのみである。前回の“北摂の昆虫(1)蝶類”(1981)と合せて読むとこの地域の蝶のことがよくわかり楽しい。ただ会誌 Crude との関連に言及されていないので、本書は独立の出版物になるものであろう(定価3,200円と記入されている)。従って従来の Crude の紹介と違って此処で紹介しておく。

学会誌・同好会誌・連絡誌

(IV — 1989 ~ IX — 1989)

のせ(大阪昆虫同好会連絡誌)

Vol. 18, No.1-8 (I-Ⅷ, 1989)

兵庫陸水生物(兵庫陸水生物研究会々誌)

No.33 (1989-6月)

Parnassius(淡路混虫研究会々誌)

No.35 (1989-6月)

混虫ずかん(但馬むしの会連絡誌)

No.21 (1989-7月)

会費納入についてお願い

1990年度会費 2,500円

出費多端の折、恐縮に存じますが、会費を年内に同封振替用紙御利用の上、お願い申し上げます。

交 換 誌

(I ・ 1989 - IX ・ 1989)

(いずれも本部に保管しております)

越虫 (越中むしの会連絡誌)

No.18, 臨時号, 19.

すかしば (山陰むしの会々誌)

No.31.

山陰むしの会連絡誌

No.47,48,49.

だんだら (福井むしの会々報)

No.3

神奈川県立博物館研究報告 自然科学 18号

神奈川県自然誌資料 10 (神奈川県立博物館)

琉球の昆虫 (沖縄昆虫同好会々誌)

No.12,13.

るりぼし (水戸昆虫研究会々誌)

No.13

編 集 後 記

- 本年は採集の好期5-7月に気温が割合低かったり雨が多かったりで、虫との出会いが余り芳ばしくなかったように思いますがどんなものだったでしょうか。
 - 第17巻第2号をお届け致します。新家 勝氏から多くの御投稿を頂いて大いに助かりました。氏の報文にもありますように、かつて私達の身近の所に色々の虫達がいたものですが、現在都市周辺部ではこう言った虫達と接する機会は確実に減少しています。淋しい限りです。記録は残しておきたいものです。
- 反面、私達にとって歓迎しない虫たちは意外と増加しているようすし、外来種が国内で吾が者に蔓延を始めているのも事実です。

- 1989年8月12日多紀郡西紀町の自動車道の電灯に多く飛来していたとガムシをlex.採集されたのを蜂谷幸雄氏から御慮与頂いた。最近このような大型水棲甲虫になかなかお目にかかれないだけにうれしく、まだこのあたりにはいるのだと喜んでいる。
- 第18巻第1号は来年5月にお届け出来るように頑張ります。原稿は若干手持ちがありますが、同じ願振れでも困りますので短報で結構ですからお気軽に御投稿下さい。
- 来年度の会費の方も宜しく

(T)

きべりはむし 第17巻第2号

1989年11月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：榊文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
